

* 答はすべて解答用紙に書きなさい。
* 句読点・記号も字数に数えます。
* 本文は出題の都合上、一部変更しています。

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

プラタナスの葉は大きい。ところどころに黄色や茶色をにじませた落ち葉は、シミをうかせた①キヨジンのてのひらのようでもある。

このちゃん②ヒキいるチームSが最初にたのまれた仕事は、③ゲンカンさきに積もった④そのの掃きそうじだった。千鶴とゆうかが掃きあつめ、敬太郎とタボがゴミ袋につめ、それをこのちゃんがゴミ④シュウシュウ所へ運び――の、地道なくりかえし。ようやく足もとがすっきりすると、つぎはゲンカンロビーのそうじ。男子ふたりがそうじ機をかけ、女子三人はぞうきんで⑤マドをみがいた。そこまでは万事、順調だった。

「キミたち、仕事が遅いね。この前、来てくれた中学生たちとはぜんぜんちがうわ」
⑥タントウ職員の中宮さんから感心されたほどだ。

「ほんとですか？ よかったあ」
照れ笑いする四人を代表し、チームリーダーのこのちゃんは晴ればれとした笑顔を返した。

「あたしたち、はじめてだからどきどきしてたんです」
生まれてはじめてのボランティア実習。北見第二中学校の生徒たちは、年に一度、いくつかのチームにわかれて校外へおもむき、午後の授業に代わってボランティアを体験する。

どこでなにをするのかは、一年A組ではくじびきで決めた。(S)のカードを引きあてた瞬間、このちゃんのもち場は特別養護老人ホームの(清流園)となつた。

よりによって……。

正直、最初はがつかりした。体が弱つたお年よりたちの施設なんて、ほかのチームが行く保育所や図書館とくらべたら、ずんと重たい感じがする。

それでも、このちゃんはおちまへのガッツですぐに頭を切りかえた。

「あたし、清流園のみんなを自分のおじいちゃんやおばあちゃんだと思って、全力でがんばることにした！」

親友の真琴にもそう宣言し、自分で自分をもちあげて、この日をむかえたのだつた。

実際、いざ足をふみいれてみると、入居者のお年よりはみんな優しく、館内の雰囲気も思つていたより明るい。そうじ中も、車椅子でとおりがかつたおじいさんやおばあさんたちが、「ありがとうね」「よろしくね」などと声をかけてくれた。

「あたし、特別養護老人ホームつて、もつとこわい感じだと思つてた」

「ぼくも。もつと暗い感じと思つてた」

はじめは表情のかたかつたメンバーたちも、② おかげでなごんできたようだ。いつもの調子で鼻歌を歌つたり、ふざけあつたりするよううも見えてきた。少なくとも、ゲンカンロビーのそうじを終えたときまでは、

急に③ 雲ゆきがあやしくなつたのは、

「じゃ、つぎは介護スタッフの補佐をしてもらいます」

と、中宮さんに一階の厨房へつれていかれてからだ。(中略)

「これから介護スタッフが栄養補助のジュースを配りに行くの。けっこう、これもひと仕事で。キミたちもお手伝いしてくれる？」

「はい」

「ここからさきは五人とも別行動、それぞれタントウ者の指示にしたがつてちようだい」

「はい」

「キミたちの一番の仕事は、元気なあいさつよ。ちよつときついかもしれないけど、これもこの現実。社会勉強だと思つて、がんばつて」

五人は深く考えることなく「はい」の返事をくりかえした。

③ ちよつときつい。この現実。社会勉強。それらの意味するところを、このときはまだ知るよしもなかったのだ。

三階の廊下を、ずんずんと加藤さんが行く。移動式のワゴンをおしているのに、このちゃんが小走りになるほど、その足は速い。

「4 ちやかちやかやつてかないとね、いつまでたつても終わらないのよ、この仕事」

このちゃんタントウの加藤さんは、三十代なかばくらいの女の人。身のこなしがてきぱきとしていて、はつきりともを言うところが、バスケット部のキャプテンと少し似ている。

「言つとくけど、わたしたちがまわるのは、ほとんど寝たきりの人たちの居室よ。ドリンクもひとりじや飲めないから、サポートが必要」

「わ、たいへんですね」

「B 序の口、序の口。ほんとにたいへんなのは、入浴のサポートや床ずれのケアよ。けど、そんな仕事のときには子どもボランティアなんて、いたつてじやマなだけだから」

「ですよー、はい」

加藤さんのきつい物言いを、このちゃんは⑤ 部活のノリでやりすごした。どんなに気むずかしい先輩を相手にしているときでも、こつちが笑顔でいるかぎり、それほどひどいことにはならないものだ。

「こんにちは！ おやつ、ジュースをおもちしました」

最初の居室へ入るときにも、言われたとおりに元気な声をはりあげた。が、返つてきたのは、6 ひんやりとした沈黙。マド側と廊下側、ふたつのベッドに横たわつていたのは、このちゃんが想像していた以上に弱々しい、小さくやせた老人たちだった。深く落ちくぼんだ四つの瞳は、このちゃんのほうを見むきもしない。(中略)

「今日はりんごジュースです。いま、用意しますからね」

この時点で早くもC 腰が引けていたこのちゃんをしり目に、加藤さんがしやしきしきと動きだす。

「a」ジュースの紙パックを開け、ふたつのコップへそそぐ。そこに顆粒の添加剤を加え、スプーンでかきまぜる。と、「b」液体がとろみをおびていく。

「うまくものを飲めないお年よりは、こうしたほうがのをとおしやすいのよ」
加藤さんはそれをスプーンですくい、廊下側にいるおじいさんのイ^イ乾いたくちびるへ運んだ。ひと口、もうひと口、またつぎのひと口。無表情のまま口をもごもごさせているおじいさんからは、どんな味なのかも伝わつてこない。

「あなたもやつてみて」

加藤さんから言われ、このちゃんは⑦ キンチョウしながらも、「はい」とマド側のおじいさんへ歩みよつた。

「おじいちゃん、りんごジュースです」

この人はあたしの⑧ だ。そう自分に言いかけながら、「c」ゆるいゼリー状のジュースを口へ近づける。

力なく開かれたくちびるに、そつとスプーンをのせた。おじいさんが口を⑨ トじ、のどもとの筋肉をかすかにふるわせる。

よかった。のどをとつたようだ。

「あ、おいしいですか？」

だまつていられず、精一杯の笑顔でこのちゃんは聞いた。

とたん、ぼうつと天井を映していたおじいさんの瞳が、はじめてこのちゃんに焦点をむすんだ。みるみるその目に涙がたまり、つうつと、ひと筋のしずくがしたり落ちる。

「おじいちゃん？」

あわてて顔をのぞきこんだこのちゃんに、おじいさんは言った。

「とんかつが食いたい」

気の毒だけでしょうがないのだと、部屋を出るなり、加藤さんは言った。

「あのおじいさん、もう歯はないし、腎臓は悪いしで、病人食以外は食べられないの。あげものなんて、とんでもない」

「d」加藤さんの言うとおりのだろう。頭ではわかつていても、とんかつが好物のこのちゃんに、あの涙はせつなすぎた。

あの人はもう二度ととんかつが食べられないのか？

好きなものも食べられないまま、あそこで、寝たきりで生きつづけるのか？

痛ましいのはあのおじいさんだけではなかった。加藤さんについていった方々で、このちゃんはおなじような境遇のお年よりたちをつぎつぎ前にした。

とろみをつけたジュースですらものをとらせない人。

このちゃんを⑩ マコと思ひこんで泣く人。

家族がむかえにこないと怒る人。

これが「この現実」ならば、悲しすぎる。そう思いながらも、このちゃんはその心を奥にトじこめ、表面的には笑顔でいつづけた。

きついときほど、よく笑う。それは、このちゃんがいつのまにか身につけたくせのようなものだ。部活の練習中、疲れたときほど「ファイト！」と声をはりあげるように、泣きたいときほど笑うことで自分を⑪ ササえようとする。

「失礼しました！」

最後まで元氣にあいさつをしつづけたこのちゃんに、うけもちの部屋をまわり終えると、加藤さんは初めてねぎらいの言葉をくれた。

「おつかれさま。あなた、タフね。たいがいの子は、とちゅうでぼうつとなつちやうもんだけど」

その言葉の意味をさつたのは、「ちよつと休んで」と中宮さんに連れていかれた休憩室で、さきに仕事を終えていた四人と再会したときだ。

⑫ エ卓上のおかしにがつついていた男子ふたりはともかく、女子のふたりはみごとに8 「ぼうつ」を絵に描いたような顔をしていた。

「相本さん、ゆうかちゃん。どうだった？」

声をかけても、返事がない。千鶴はうつろな目をしたままで、ゆうかはその千鶴のうでをぎゅつとにぎりしめている。

「長生きするの、やめたんだって」

「お母さんが寝たきりになったらどうしようつて、こわくなったんだって」
代わつて答えたのは、⑬ 敬太郎とタボだ。

「そっかあ」

なんだか急に気がぬけて、このちゃんはへたりとパイプ椅子に腰をしずめた。

「あたしも、百まで生きるのやめよっかな」

「え、松原まで？」

敬太郎が目を丸くする。

「松原は、なにがあっても落ちこまないと思ってた」

「そんなあ。っていうか、敬太郎くんたちは平気なの？」

「ぼくたちがまわった部屋は、わりと元気な人が多かったんだ。みんな自分でジュース飲めたし」

「あ、そうなんだ」

どうやら、ここに入居している全員が弱りきっているわけではないらしい。少しほっとしたこのちゃんの横で、「ずるいよね」と、ゆうかが声をとがらせた。

「男子だけ、らかな仕事しちゃって」

「そう言われたって、決めたの中官さんだし。それに、ぼくがまわった部屋だって、認知症の人とかはいっぱいたよ。マゴに会いたいわって泣いてる人もいた」

「かわいそうって思わないの？」

「思うよ、もちろん。家族はなにしてるんだろうって思う。でも、それでもここにいる人たちは、こういうところに入るお金があるだけ、まだ恵まれてるんじゃないのかな」

「っていうかさ、どんなふうでも、長生きしてるってことは、いいことなんだよ」

タボが横から口をはさむと、ゆうかはますますむきになった。

「そんなことない。あんなふうに生きてるなら、あたしは死んだほうがマシ」

「それは、まだとうぶん死なないって自信があるからじゃないの」

「だから、死ぬのはいけど、老人になるのがいやなのっ」

敬太郎とタボがこまった顔をするのを見て、このちゃんは自分がチームリーダーであるのを思いだした。

「ゆうかちゃん、とりあえずいまは、自分の老後より、ここににいる人たちのことを考えよう。みんな、いやでも年をとっちゃったんだから、しょうがないよ。あたしたちが暗い顔してたら、みんなも暗い気持ちになっちゃうし、ちよつとむりしても、最後まで笑ってよう。ね」

から元気をふりしぼり、¹⁰「フアイト！」とこぶしを突きあげる。

フアイト！ と、バスケット部の仲間たちなら返してくれるはずだった。

が、ゆうかはばたんとテーブルに顔をふして言った。

「その体育会系のノリ、あたしはむり」

「あなた、おいくつ？ こんなところに來たって、おもしろくないでしょう。たいくつでしょう」

「十三歳です。あの、学校の体験学習なんですけど、たいくつじゃないです。いろいろ、勉強になります」

「十三歳なんて、いいわねえ。いまの子は、なんでももっている。楽しいことがたくさんあるでしょう」

「はい。でも、あたしはスマホ、もってないんです」

「あら、スマホ？ わたしは見たこともないわねえ」(中略)

チームSの最後の仕事は、「話し相手」だった。二階のカフェテリアでくつろいでいるお年よりたちとの交流。このちゃんに声をかけてくれたのは、どこかかわいらしい上品なおばあさんで、のんびりと言葉を交わしているうちに、このちゃんはゆうかのオ¹¹撃によるダメージからじよじよに立ちなおっていた。

「おばあちゃんは、いま、おいくつですか」

「ええっと、八十六になるかしら」

「わあ、すごい」

「どうして？ だれでも生きていけば年なんてとるものよ」

「でも、八十六年も生きるなんて、すごいです。あたし、十三年目でも、ときどき疲れちゃうから」

「あら、ま、どうして？」

おばあさんが灰色の眉をよせる。

いけない。このちゃんはあわてて撤回した。

「うそ、うそ、あたし、ぜんぜん疲れません。毎日、すつごく楽しいです」

安心してからおうと力をこめたのに、なぜだか、¹¹おばあさんはさびしげな目をしてしまった。

「ゆうかちゃん、待って！」

千鶴のさけび声したのは、そのときだ。

ハツとふりむいたこのちゃんの目に、泣きながら廊下へ飛びだしていくゆうかの姿が映った。そのすぐあとを千鶴が追っていく。

ふたりがカフェテリアから去ったのを見て、とつさにこのちゃんも腰をうかした。

「すみません。ちよつと……」

一瞬、見失ったふたりを見つけたのは、二階の女子トイレだった。洗面台にしなだれかかって泣いているゆうかをなだめるように、千鶴が背なかをさすってやっていた。

「ゆうかちゃん、だいじようぶ？ どうしたの」

なにを聞いても、ゆうかはただただしやくりあげるばかり。

代わりに横から千鶴が答えた。

「おばあちゃんと、ゆうかちゃんと、わたしと、三人で話してたの。そしたら、急にゆうかちゃんが泣きだして」

「理由もなく？」

「理由は、その……最初ね、おばあちゃんがゆうかちゃんに言ったの。なやみがあるなら話してちょうだい、って。なんでかわかんないけど、ゆうかちゃんにだけ。そしたら、ゆうかちゃんが……」

¹²「ちらりとゆうかをうかがい、千鶴が声を落とす。

「人間を信じるのがむずかしい、って」

このちゃんはどきっとした。

人間を信じるのがむずかしい。ゆうかがそんなことを考えていたなんて。

「そしたらね、おばあちゃんが言ったの。簡単だよ、って。人をゆるすことに上手になればいい、そしたら信じることもろくなるよ、って。わたしはよくわかんなかったんだけど、それ聞いたら、ゆうかちゃんが急に泣きだして……」

千鶴がまたゆうかをチラ見する。

「なんとなくだけど、たぶん、美奈ちゃんのこと」

「美奈ちゃん？」

「思いましたんじやないかな。ゆうかちゃん、ずつと気にしてたから」

「え」

「ひどいこと言っちゃったって」

その声にあおられたように、ゆうかが一段と泣き声のボリュームをあげる。そういえば、このちゃんは思った。このところ、ゆうかと美奈がいっしょにいるのを見かけない。代わりに、ゆうかはいつも千鶴たちのグループにいる。ふたりになにかあったのか。

気になる。が、このちゃんには¹³カフェテリアにいる人たちのことも気にな

った。ボランティアとしてここにいる以上、いまは自分たちの問題よりも、話し相手としての役目をはたすこと、少しでもお年よりたちをばげますことを考えなきゃいけないのでは、と。

「ゆうかちゃん」

そこで、体育会系のノリにならないよう、声のトーンに気をつけながら言った。

「このことは学校にもどってから、ゆっくり話さない？ きつと、まこちゃんも相談にのってくれるよ。とりあえず、いまはカフェテリアにもどろう。ね、おばあちゃんたち、心配してるよ」

またはねつけられるのか。内心びくびくしていたものの、ゆうかはすんなりとうなずいた。

「うん。わかった」

洗面台の鏡ごしに、ゆうかの赤い目と目が合う。

「このちゃん。さっきはごめんね。やなこと言っちゃって」

「え？ ううん、ぜんぜん」

「あたし、チームSでよかったって、いまは思う。¹⁴ あのおばあちゃんに会えたから」

ぼろり。言いながらまたほおに涙を伝わせる。

ゆうかちゃんって、いろんな意味で、すなおな子なんだな……。¹⁵ いつも素

通りしていた家にはじめて上がったみたいに、このちゃんはこのとき、ゆうかという子の奥の部屋まではじめて足をふみいれた思いがした。おなじクラスにいても、気づかなかったこと。毎日、教室で顔を合わせつづけた八ヶ月よりも、今日一日の発見のほうが大きかった気がする。

¹⁶さらなる「気づき」がもたらされたのは、ゆうかがトイレットペーパーで鼻をかむのを待って、いっしょにカフェテリアへもどってからだった。

「あら、ほら、もどってきたよ」

「よかった、よかった」

三人の帰りを待っていた車椅子のおばあさんたちが、ゆうかをかこんで、いっせいにしゃべりだしたのだ。

「悲しくなっちゃったの？ かわいそうに。かわいのお目々が真っ赤だよ」

「ごめんねえ。おばあちゃんが、悪い話をしちゃったのかねえ」

「十三歳なんて、一等、感受性が強い年ごろなんだよ。あたしらにもあったっけねえ、そんな年のころが」

「ジュース飲む？ おばあちゃんのアメなめるかい？」

このちゃんがふいをつかれたのは、口々にゆうかをばげますおばあさんたちが、どこか生き生きとして見えたことだ。涙もろい女の子を心配しながらも、その声にはよゆうとハリがあった。さっきのおばあさんも、にこにここと目じりをたらししてゆうかの手をさすっている。

あ、そっか。

老人たちのまんなかではにかむゆうかを前に、この日、はじめてこのちゃんの顔から笑みが消えた。

だれだって、はげまされるよりは、はげましたいんだ……。

せっかく掃きあつめたプラタナスの葉が、帰るころには、またゲンカンさきにちらほらと散っていた。

「ほんつとにありがとね。おつかれさま」

中宮さんに見送られて清流園をあとにしたこのちゃんは、五人のなかで一番最後にその落ち葉をふみしめた。

問 1 〃ア〃オの漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問 2 〃①〃⑩のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問 3 〃1〃「それ」とは何をさしていますか。九字で答えなさい。

問 4 〃2〃「おかげでなごんできたようだ」とありますが、その理由を三十五字以上四十字以内で答えなさい。

問 5 〃A〃Cの意味として最も適当なものを、それぞれ次のア～エから選び、記号で答えなさい。

A 「雲ゆきがあやしくなった」

ア 不思議なことが起きそうだ イ 天気が悪くなりそうだ
ウ よくないことが起きそうだ エ 都合が悪くなりそうだ

B 「序の口」

ア はじまったばかりのところ イ ついでにすること
ウ きっかけになるできごと エ 先にしておくこと

C 「腰が引けていた」

ア 気をゆるしていた イ 気がとがめていた
ウ 気にかかっていた エ 気後れしていた

問 6 〃3〃「ちよつときつい。ここの現実」とありますが、このちゃんはこの後「ここの現実」を知ってどう思いましたか。それが最もよく表されている一語を、本文一枚目下段から五字以内でぬきだしなさい。

問 7 〃4〃「ちゃかちやかやってかないとね、いつまでたつても終わらないのよ、この仕事」とありますが、ここで用いられている表現技法として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 擬人法 イ 体言止め
エ 倒置法 オ 対句
ウ くり返し

問 8 〃5〃「部活のノリ」とはどのような態度のことですか。十文字以上二十五字以内で答えなさい。

問 9 〃6〃「ひんやりとした沈黙」とありますが、これはどのような様子を表現していますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 何の期待もせず、ボランテアが来ても無視している様子。
イ 元気なこのちゃんの声をうつとういしいと思っている様子。
ウ 空調が強すぎ、お年よりたちが寒そうにしている様子。
エ このちゃんのあいさつにも無反応で、生気のない暗い様子。

問 10 〃【 a d に次のア～エをあてはめ、記号で答えなさい。

ア みるみる イ たぶん
ウ まずは エ おそろおそろ

問 11 〃にあってはまる語を、本文からぬきだしなさい。

問 12 〃7〃「あの、おいしいですか?」とありますが、この時のこのちゃんの気持ちとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア おじいさんが飲めたことにほっとしたが、だまっていることに耐えられず、声をかけたくなった。
イ だまっていることが苦痛で、無理にでも返事をしてほしいと願った。
ウ おじいさんに怒られないように、優しく元気にふるまわなければならぬと思った。
エ 本当は話しかけたくないが、飲ませてあげたことにお礼を言っってほしいと思った。

問 13 〃8〃『ぼうつ』を絵に描いたような顔」とありますが、この時の二人の状態として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 期待を裏切られ、がっかりしている状態。
イ きびしい仕事で疲れ果ててしまった状態。
ウ 精神的なショックを受け、声も出せない状態。
エ 別の楽しいことに気をとられている状態。

問 14 〃9〃「敬太郎とタボ」とありますが、次の文章は二人がこのホームのお年よりについてどのように考えているかをまとめたものです。(1) 1～4 にあってはまることばを、それぞれ本文から四字以内でぬきだしなさい。

敬太郎はお年よりに対する(1)の対応に疑問を持っているが、こういうホームに入る経済的なゆとりがある分、(2)いると考えている。タボはどんな状態でも(3)しているということは(4)だと考えている。

問 15 〃10〃『ファイト!』とこぶしを突きあげる」とありますが、この時のこのちゃんの気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア これ以上気持ちさが沈まないようにふざけて見せて、明るくみんなで仕事をしたいという気持ち。
イ ボランテアの目的を思いだし、学校の代表として恥ずかしいくない行動をしようとみんなをばげます気持ち。
ウ 男子と女子の対立を心配し、ゆうかちゃんをなだめて仲良く活動できるようにしたいという気持ち。
エ 気がぬけた自分をふり立たせ、メンバーをばげましてボランテア活動を明るくやりとげようという気持ち。

問 16 〃11〃「おばあさんはさびしげな目をしておしだまった」とありますが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 心配してあげたのに、このちゃんに強く拒絶されたから。
イ このちゃんが本音を言わず、ごまかしてしまったから。
ウ このちゃんの言うことがすぐ変わるの、ついていけないと思ったから。
エ だれにでもわかるうそをつくこのちゃんにあきれ果てたから。

問 17 〃12〃「ちらりとゆうかをうかがい、千鶴が声を落とす」とありますが、このような態度からわかる千鶴の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 悩んでいるゆうかを、人前で泣くまで追いつめたことをくやんでいる。
イ ゆうかの言葉を受け止められず、このちゃんに押しつけたいと思っている。
ウ ゆうかの悩みをこのちゃんに話していいか迷い、ゆうかを気づかっている。
エ おばあさんの態度でゆうかが逆に傷ついたのではないかと心配している。

問 18 〃13〃「カフェテリアにいる人たちのことも気になった」とありますが、この時のこのちゃんの気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 責任感 イ 信頼感
ウ 一体感 エ 優越感

問 19 〃14〃「あのおばあちゃんに会えたから」とありますが、ゆうかはおばあちゃんのどのような言葉に心を動かされたのですか。本文から三十五字以内でぬきだし、はじめとおわりの五字で答えなさい。

問 20 〃15〃「いつも素通りしていた家にはじめて上がったみたい」とありますが、これはどのようなことをたとえているのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

イ いつもはやり過ぎしていたことの大切さに、気づいたということ。
エ 今まで話したことのなかったゆうかと話して、親しくなつたということ。
ウ 遠くから見ているだけだった人に、話しかけられたということ。
エ ふだんの生活では気づかなかつたゆうかの性格を知つたということ。

問 21 〃16〃「さらなる『気づき』」とありますが、どのようなことに気づいたのですか。本文から一文でぬきだし、はじめの五字で答えなさい。

ア	
養護	
イ	
乾	
いた	いた
ウ	
焦点	
エ	
卓上	
オ	
一撃	

⑥		①	
	タン トウ		キ ヨ ジ ン
⑦		②	
	キン チ ヨウ	いる	ヒ キ いる
⑧		③	
じ	ト じ		ゲン カン
⑨		④	
	マ ゴ		シ ユウ シ ユウ
⑩		⑤	
え	サ サ え		マ ド

問 3

問
4

問 5

A
B
C

問 6

問 7

問 8

問 9									
問 10	<table border="1"> <tr> <td>a</td> <td></td> </tr> <tr> <td>b</td> <td></td> </tr> <tr> <td>c</td> <td></td> </tr> <tr> <td>d</td> <td></td> </tr> </table>	a		b		c		d	
a									
b									
c									
d									

問 11	
問 12	
問 13	

問 14	1			
	2			
	3			
	4			

問 15

問 16

問 17

問 18

問 19

5

問 20

問
21

受験番号